多層弾性解析ソフトウエア GAMES に 対応原理を適用した舗装構造の粘弾性解析

小澤良明¹·高橋 修²·松井邦人³

 ¹正会員 博(工) センチュリテクノ株式会社 (〒160-0004 東京都中央区日本橋小伝馬町 2-8 新小伝馬町ビル 7F) E-mail: oza-y@msj.biglobe.ne.jp
 ³フェロー会員 博(工) 長岡技科大学 環境・建設系 (〒940-2188 新潟県長岡市上富岡町 1603-1)
 ²フェロー会員 PH.D 東京電機大学 理工学部 (〒350-0394 埼玉県比企郡鳩山町石坂)

本研究の目的は、GAMES に対応原理を導入し、粘弾性層から成る多層構造の応答解析を行えるソフトウ エアへの拡張である. 各層の力学特性を一般化 Maxwell model で表されると考え、対応原理を用い理論解を 誘導している. 外力は、多層構造の表面において円形領域に等分布する鉛直荷重と水平荷重およびモーメン ト荷重を考慮できるように拡張した. 例題として、舗装構成する各層の力学特性に、Burger's Model、Maxwell Model を用いて応答解析を行った. なお鉛直荷重に関する応答値は、FEM(ADINA)と一致することを確認し ている.

Key Words : multilayered half space, generalized Maxwell model, correspondence principle *FFT*, permanent deformation

1. はじめに

舗装構造の応答解析を容易に行えることは、舗装を理 論的に設計する上で最重要案件である.現在、舗装は多 層弾性理論に基づく層状構造と考えて、理論を構築し、 ソフトウエアが開発されている.Burmisterの解は軸対称 問題の解として草分けの研究として評価を受けている. 舗装表面に水平荷重が作用する解としては木村の解があ る^{1,2}.

また,過去数十年の間に海外では BISAR, KENLAYER, JULEA, CIRCLY など色々なソフトウエアが開発されてき た.わが国でも ELSA³, GAMES⁴が良く知られている.

舗装はわだち掘れなどの永久変位が生じることは良く 知られている.しかし、このような現象の発生は多層弾 性理論に基づく解析では説明できない.そのため、弾性 解析で得られた鉛直ひずみの一部が路床に残留すると考 え、経験的方法で永久変位を予測することが行われてき た.理論的に永久変位を予測するためには、粘弾性のよ うな力学モデルの導入が必要である.多層弾性理論と比 べ粘弾性層で構成される多層構造の応答解析は、その複 雑性のため有限要素法や境界要素法を用いて解析するこ とが多い.理論解として Park と Kim⁵, Hopman⁶, Chen ら⁷の研究がある.Wang と Birgison⁸は境界要素法を、董 ら⁹, Elseifi ら¹⁰は有限要素法を用いて舗装の構造解析を おこなっている. 多層構造の粘弾性解析は主に鉛直荷重についての研究 がほとんどであり、多層構造表面に水平荷重が作用する 問題の理論解は見当たらない.そこで本研究は、応力と ひずみの関係を、一般的な粘弾性モデルである一般化 Maxwell Model で表せると仮定した.線形弾性論と線形粘 弾性論の間には、ラプラス変換を通じて対応の原理が成 立する^{11),12),13}この原理と、GAMES で導いた鉛直・水平 等分布荷重による理論解、藤波ら¹⁴⁾が導いたモーメント 荷重に対応する解とを組み合わせ、粘弾性解析を行える ソフトウエアを開発した.

3層構造を例題として、上記の3種類の荷重タイプについて応答解析を行った.鉛直等分布荷重に関しては、汎用 FEM の ADINA の結果と比較し、解の妥当性を検証した.さらに、その表面に時速2(km/h)の走行荷重を考慮し、0.5秒間円形等分布荷重を水平に作用させ粘弾性応答解析を行い、その特性を全層弾性の構造との違いを明らかにした.また粘弾性応答解析が永久変位にどの程度適応可能か確認するため、各力学モデルを組み合わせて舗装構造を模擬し、構造解析を行いその結果を考察する.

2. 理論

(1) 基本式

非軸対称問題を対象とする場合,応力の釣り合い式は,



 $u_{z\theta} = q_0 \sin \theta$

(a) 水平等分布荷重



図-1 載荷荷重形状

$$\frac{\partial \sigma_r}{\partial r} + \frac{1}{r} \frac{\partial \tau_{r\theta}}{\partial \theta} + \frac{\partial \tau_{rz}}{\partial z} + \frac{\sigma_r - \sigma_{\theta}}{r} = 0$$
(1a)

$$\frac{\partial \tau_{r\theta}}{\partial r} + \frac{1}{r} \frac{\partial \sigma_{\theta}}{\partial \theta} + \frac{\partial \tau_{\theta z}}{\partial z} + \frac{2\tau_{r\theta}}{r} = 0$$
(1b)

$$\frac{\partial \tau_{rz}}{\partial r} + \frac{1}{r} \frac{\partial \tau_{\theta z}}{\partial \theta} + \frac{\partial \sigma_{z}}{\partial z} + \frac{\tau_{rz}}{r} = 0$$
(1c)

となる. σ_r , σ_{θ} , σ_z , τ_r は微小要素の応力である. 変 位とひずみと関係式は,

$$\varepsilon_{r} = \frac{\partial u_{r}}{\partial r} , \quad \varepsilon_{\theta} = \frac{u_{r}}{r} + \frac{1}{r} \frac{\partial u_{\theta}}{\partial \theta} , \quad \varepsilon_{z} = \frac{\partial u_{z}}{\partial z} ,$$

$$\gamma_{r\theta} = \frac{1}{r} \frac{\partial u_{r}}{\partial \theta} + \frac{\partial u_{\theta}}{\partial r} - \frac{u_{\theta}}{r} , \quad \gamma_{\theta z} = \frac{\partial u_{\theta}}{\partial z} + \frac{1}{r} \frac{\partial u_{z}}{\partial \theta} ,$$

$$\gamma_{rz} = \frac{\partial u_{r}}{\partial z} + \frac{\partial u_{z}}{\partial r}$$
(2)

と表せる. $\varepsilon_r, \varepsilon_{\theta}, \varepsilon_z$ は、それぞれ $\sigma_r, \sigma_{\theta}, \sigma_z$ に対応する垂 直ひずみ. $\gamma_{rz}, \gamma_{r\theta}, \gamma_{\theta_z}$ は $\tau_{rz}, \tau_{r\theta}, \tau_{\theta_z}$ に対応するせん断ひ ずみである. 弾性係数は時間に依存する関数と仮定する. 応力とひずみの関係は、

となる. *E*(*t*) は時間依存の弾性係数, *v* はポアソン比である. 多層構造では, それぞれの層で材料特性や層厚が 異なるが,式(1),(2),(3)の関係がすべての層で成立つ.

次に境界条件を考える. 図−1(a)の水平等分布荷重の場合,水平等分布荷重 q₀を載荷半径 a の領域内に, x 軸か

らの方向に作用させた時、 z=0における境界条件は、

$$r \le a \qquad \begin{cases} \tau_{r_2}(r,0,t) = -q_0(t)\cos\theta\\ \tau_{r_{\theta}}(r,0,t) = q_0(t)\sin\theta \end{cases} \tag{4a}$$

$$r > a$$
 $au_{rz}(r,0,t) = au_{r\theta}(r,0,t) = 0$ (4b)

$$0 \qquad \sigma_z(r,0,t) = 0 \qquad (4c)$$

と表せる. 次に図-1(b)に記す台形分布荷重を考える. 図 のように,式(4)の等分布荷重と逆対称三角形分布荷重を 重ね合わせ,三角形分布荷重を載荷する. 逆対称三角形 分布の鉛直荷重を q₁ とする.

$$p(t) = \begin{cases} x \cos \theta p_1(t)/a & 0 \le r \le a \\ 0 & r \le a \end{cases}$$
(5a)

水平方向の逆対称三角形分布をq_(t)とすると,

$$q(t) = \begin{cases} x \cos \theta q_1(t)/a & 0 \le r \le a \\ 0 & r \le a \end{cases}$$
(5b)

 $q_1(t) \ge p_1(t)$ の間には摩擦係数を μ で表すと、 $q_1(t) = \mu p_1(t)$ の関係がある.式(4),(5)をFourier変換し、 その結果をさらにHankel変換すれば、逆対称三角形分布 荷重による境界条件が求まる.

(2) 理論解の誘導

 $r \ge$

Michell 関数 $\Phi(r, \theta, z, t)$ と Boussinesq 関数 $\Psi(r, \theta, z, t)$ を用いて変位を表すと,

$$u_r = -\frac{\partial^2 \Phi}{\partial r \partial z} + \frac{2}{r} \frac{\partial \Psi}{\partial \theta}$$
(6a)

$$u_{\theta} = -\frac{1}{r} \frac{\partial^2 \Phi}{\partial \theta \partial z} - 2 \frac{\partial \Psi}{\partial r}$$
(6b)

$$u_{z} = 2(1-\nu)\nabla^{2}\Phi - \frac{\partial^{2}\Phi}{\partial z^{2}}$$
 (6c)

と表せる.式(1)の応力の釣り合い式に,式(2),(3)の変位と ひずみ,ひずみと応力の関係,式(6)に記した変位を順々 に代入すれば,

$$\nabla^4 \Phi(r,\theta,z,t) = 0 \tag{7a}$$

$$\nabla^2 \Psi(r,\theta,z,t) = 0 \tag{7b}$$

ここで,

$$\nabla^2 = \frac{\partial^2}{\partial r^2} + \frac{1}{r}\frac{\partial}{\partial r} - \frac{1}{r^2}\frac{\partial^2}{\partial \theta^2} + \frac{\partial^2}{\partial z^2}$$

となる.ここに、 Φ は重調和関数、 Ψ は調和関数である. Φ 、 Ψ を次式のように変数分離すれば、

$$\Phi(r,\theta,z,t) = \phi(r,z,t)\cos\theta \tag{8a}$$

$$\Psi(r,\theta,z,t) = \psi(r,z,t)\sin\theta \tag{8b}$$

式(8)を式(7)に代入すると、

$$\overline{\nabla}^4 \phi(r, z, t) = 0 \tag{9a}$$

$$\overline{\nabla}^2 \psi(r, z, t) = 0 \tag{9b}$$

ここで,

$$\overline{\nabla}^2 = \frac{\partial^2}{\partial r^2} + \frac{1}{r}\frac{\partial}{\partial r} - \frac{1}{r^2} + \frac{\partial^2}{\partial z^2}$$

式(9)の時間項*t* に対し Fourier 変換, 空間項*r* に対し Hankel 変換すると次式となる.

$$\left(\frac{d^2}{dz^2} - \xi^2\right)^2 \hat{G}(\xi, z, \omega) = 0$$
(10a)

$$\left(\frac{d^2}{dz^2} - \xi^2\right) \hat{H}(\xi, z, \omega) = 0$$
(10b)

ここに[^]は Fourier 変換を意味している. なお $\hat{G}(\xi, z, \omega)$, $\hat{H}(\xi, z, \omega)$ は、次式で表される.

$$\hat{G}(\xi, z, \omega) = \int_0^\infty r \hat{\phi}(r, z, \omega) J_1(\xi r) dr$$
$$\hat{H}(\xi, z, \omega) = \int_0^\infty r \hat{\psi}(r, z, \omega) J_1(\xi r) dr$$

式(10)を解くと、 $G(\xi, z), H(\xi, z)$ は、

$$\hat{G}(\xi, z, \omega) = (A + Bz)e^{\xi z} + (C + Dz)e^{-\xi z}$$
(11a)

$$\hat{H}(\xi, z, \omega) = Ee^{\xi z} + Fe^{-\xi z}$$
(11b)

となる.各変位・応力成分を,次のような関数として扱い, Hankel 変換を行う.

$$H_{1} = \int_{0}^{\infty} r \left(\frac{\hat{u}_{r}}{\cos \theta} + \frac{\hat{u}_{\theta}}{\sin \theta} \right) J_{2}(\xi r) dr$$
(12a)

$$H_{2} = \int_{0}^{\infty} r \left(\frac{\hat{u}_{r}}{\cos \theta} - \frac{\hat{u}_{\theta}}{\sin \theta} \right) J_{0}(\xi r) dr$$
(12b)

$$H_{3} = \int_{0}^{\infty} r \left(\frac{\hat{u}_{z}}{\cos\theta}\right) J_{1}(\xi r) dr$$
 (12c)

$$H_{4} = \int_{0}^{\infty} r \left(\frac{\hat{\sigma}_{z}}{\cos \theta} \right) J_{1}(\xi r) dr$$
 (12d)

$$H_{5} = \int_{0}^{\infty} r \left(\frac{\hat{\tau}_{ac}}{\sin \theta} + \frac{\hat{\tau}_{zr}}{\cos \theta} \right) J_{2}(\xi r) dr$$
(12e)

$$H_{_{6}} = \int_{_{0}}^{\infty} r \left(\frac{\hat{\tau}_{_{de}}}{\sin \theta} - \frac{\hat{\tau}_{_{zr}}}{\cos \theta} \right) J_{_{0}}(\xi r) dr$$
(12f)

$$H_{\gamma} = \int_{0}^{\infty} r \left(\frac{\hat{\sigma}_{r}}{\cos\theta} + \frac{1}{r} \frac{2\mu \hat{u}_{r}}{\cos\theta} + \frac{1}{r} \frac{2\mu \hat{u}_{\theta}}{\sin\theta} \right) J_{1}(\xi r) dr \qquad (12g)$$

$$H_{_{8}} = \int_{_{0}}^{\infty} r \left(\frac{\hat{\sigma}_{_{r}}}{\cos\theta} + \frac{\hat{\sigma}_{_{\theta}}}{\cos\theta} \right) J_{_{1}}(\xi r) dr \qquad (12h)$$

$$H_{9} = \int_{0}^{\infty} r \left(\frac{\hat{\tau}_{r\theta}}{\sin \theta} + \frac{1}{r} \frac{2\mu \hat{u}_{r}}{\cos \theta} + \frac{1}{r} \frac{2\mu \hat{u}_{\theta}}{\sin \theta} \right) J_{1}(\xi r) dr \qquad (12i)$$

これら展開式は,松井ら¹⁵⁾が導いた GAMES の基礎理論 である多層弾性理論式と一致する.後の式展開は省略す る.なお,鉛直等分布荷重に対する式展開も同様であり, 本論では省略している.

(3) 粘弾性モデル

舗装解析で使用される一般的な粘弾性モデルとして, Burger's Model (4 要素モデル), Voigt Model, Maxwell Model (2 要素モデル)がある. これらモデルは図-2 に示す一般化 Maxwell Model で示すことが可能である¹¹⁾. 一般化 Maxwell Model における応力とひずみの関係式は,

$$\sum_{0}^{m} p_{k} \frac{d^{k}}{dt^{k}} \sigma(t) = \sum_{0}^{n} q_{k} \frac{d^{k}}{dt^{k}} \varepsilon(t)$$
(13)

Fourier 変換を当てはめる.

$$\sigma(\omega) = \frac{\sum_{0}^{0} (i\omega)^{k} q_{k}}{\sum_{0}^{m} (i\omega)^{k} p_{k}} \varepsilon(\omega)$$
(14)

ここで、

$$E(\omega) = \frac{\sum_{0}^{n} (i\omega)^{k} q_{k}}{\sum_{0}^{m} (i\omega)^{k} p_{k}}$$
(15)

と式を置き換えれば、式(14)は、
$$\sigma(\omega) = E(\omega)\varepsilon(\omega)$$
 (16)

式(3)を Fourier 変換する.

$$\begin{pmatrix} \hat{\sigma}_{r} \\ \hat{\sigma}_{\theta} \\ \hat{\sigma}_{z} \\ \hat{\tau}_{zr} \\ \hat{\tau}_{r\theta} \end{pmatrix} = E(\omega) \begin{pmatrix} \overline{\lambda} + 2\overline{\mu} & \overline{\lambda} & \overline{\lambda} & 0 & 0 & 0 \\ \overline{\lambda} & \overline{\lambda} + 2\overline{\mu} & \overline{\lambda} & 0 & 0 & 0 \\ \overline{\lambda} & \overline{\lambda} & \overline{\lambda} + 2\overline{\mu} & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & \overline{\mu} & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & \overline{\mu} & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & \overline{\mu} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \hat{\varepsilon}_{r} \\ \hat{\varepsilon}_{\theta} \\ \hat{\varepsilon}_{z} \\ \hat{\tau}_{zr} \\ \hat{\tau}_{zr} \end{pmatrix}$$
(17)

と書け, 一般化 Maxwell Model の解を導くことが可能となる.

3. 例題

(1) 理論の検証と粘弾性層の影響

Fourier 変換で導いた,一般化 Maxwell Model の妥当性 を確認するため,鉛直空間領域は多層弾性理論解,時間 領域は離散化して粘弾性の解を導くソフトウエア VEALS¹⁶⁾と汎用 FEM の ADINA の解析結果とを比較する. 本論で扱う構造モデルを Spring Model・Maxwell Model・ Burger's Model のみと限定すれば,式(15)の *E(ω)*は,

$$E(\omega) = \frac{\alpha_3 + i\alpha_4\omega - \alpha_5\omega^2}{1 + i\alpha_4\omega + \alpha_2\omega^2}$$
(18)

と示せる. 図-3 には各粘弾性のモデル図, 表-1 には式(18) のパラメータ *α*₁, *α*₂, *α*₃, *α*₄, *α*₅ と各モデルの関係を記し



図-2 一般化 Maxwell Model







(C) Buiger Stridder 図-3 粘弾性モデル

ている.

第1層はアスファルトコンクリート,第2層は路盤, 第3層は路床として,図-4に記す3層構造の多層構造体 を考える.各層の構造モデルと層特性は表-2に記す例題 Aとした.載荷荷重は図-5に記すように、0 < t < 0.5s間 のみ49kNの鉛直等分布荷重を載荷した.図-6には,載 荷中心位置の1層表面(x = z = 0), 1,2層境界位置(x = 0, z = 15cm) ·2,3層境界位置(x = 0, z = 50cm)の計3箇所 の鉛直変位を記した.なお同図には、本モデルと同じ条 件で解析した他ソフトウエアの結果も図示している.凡 例中のADINAとは汎用 FEM ソフトウエアでの結果で, VEALS は、小澤らが開発したソフトウエアの結果である. 同図より本方法の解析結果とADINA, VEALS の結果は ほぼ一致しており、本理論の妥当性を確認できる.

載荷直後瞬時に弾性変位が発生し、その後粘弾性部分 の変位が進行、除荷直前で最大になる. さらに除荷時、 瞬時に弾性変位はゼロとなり、このときの残留変位は粘 性部(ダッシュポット)によるものである. 残りの弾性変位 は弾性部とダッシュポットの力の再配分により、その後 徐々に減少している. 1 層目は Burger's Model で表される 粘弾性層であるので、除荷後表面に変位が残留している. 2 層、3 層は弾性層であるが、層境界の変位は1 層目の粘 弾性の影響を受け瞬時にゼロにはならず、徐々に減少し て消失する.

(2)水平荷重による影響

ここでは水平等分布荷重による応答解析を行う.解析 断面は図-4 に記した3層構造の多層構造体とする.構造 モデルと層特性は,表-2 に記す例題Aと例題Bの2 断面 の解析を行う.荷重は図-5のパルス荷重を使用し,図-1 (a)に記す水平等分布荷重で $\theta = 0^\circ$ 方向に載荷した.着目 位置は,1層表面(x = z = 0), 1.2層境界位置(x = 0,

表-1 粘弾性パラメータ

	α1	α2	α3	α4	α5					
Spring Model	0	0	E_M	0	0					
Maxwell Model	E_M/F_M	0	0	F_M	0					
Burger's Model	$(F_M + F_V)/E_V + F_V/E_M$	$F_M F_V / (E_M E_V)$	0	F_V	$F_M F_V / E_V$					



図-4 解析モデル

表−2 解析断面特性

			E _M	Ev	Fv	FM
例題A	1Layer	Burger's Model	4000	4000	400	400
	2Layer	Spring Model	200	-	-	-
	3Layer	Spring Model	60	-	-	-
例題B	1Layer	Burger's Model	4000	4000	400	400
	2Layer	Maxwell Model	200	-	-	200
	3Layer	Maxwell Model	60	-	-	420



図-5 載荷荷重パルス



z = 15 cm), 2,3 層境界位置(x = 0, z = 50 cm)とし,載荷 中心から前後 1m 範囲の鉛直変位を図-7 に記す.図-7(a) は,載荷開始時間t = 0sの結果である.載荷開始時間に おける応答は,粘弾性モデルの直列バネ値(表-2 の E_1)に て多層弾性解析した値と一致する.多層弾性解析ソフト ウエア GAMES で解析すると,1層表面x = 35 cm位置に て $u_z = 0.0035 \text{ cm}$ である.本ソフトウエアの結果は,例 題 A で $u_z = 0.0036 \text{ cm}$,例題 B で $u_z = 0.0037 \text{ cm}$ でほぼ 一致する.

図-7 (b) はt = 0.5s における荷重除荷直前の鉛直変位で ある.構造モデルが異なる例題 A・例題 B では、変位に 差が生じる. 1 層表面のx = 35cm 位置において、例題 A は $u_z = 0.0073$ cm、例題 B では $u_z = 0.0086$ cm であり、 例題 B の鉛直変位は0.0013 cm 大きい. 2,3 層が Spring Model である例題 Aに対し、Maxwell Model の例題 B は、 粘性部であるダッシュポット分の変位が加わり、変位が 大きくなっている.

次に 2,3 層表面の x = 35cm 位置に着目する. 例題 A の 変位は $u_z = 0.0064$ cm,例題 B では $u_z = 0.0067$ cm であ る.両モデルの差は小さい. これは第 3 層の Spring Model と Maxwell Model の違で生じた変位の差である. 路床に 対して水平荷重の影響は小さい.

載荷中心から15cm 以内の載荷領域における,1層表面, 1,2 層表面における鉛直変位は、荷重影響を大きく受け、 載荷外縁付近が盛り上がる山型の形状となる.路床上面 である 2,3 層表面の鉛直変位は、x=40cm 位置が凸とな る柔らかな形状となる.荷重による力は、1,2 層内部で分 散するため、第3 層に水平荷重の及ぼす影響は小さい.

図-7(c)は、載荷終了から4.5s 経過し、除荷変位が収ま りつつあるt = 5.0s の鉛直変位を示したグラフである.荷 重除荷前t = 0.5s ほどではないが、例題 A と例題 B の鉛 直変位に差が生じる.1 層表面x = 35cm 位置では、例題 A で $u_z = 0.0$ cm,例題 B では $u_z = 0.0019$ cm である.こ の変位が各モデルの残留変位である.

図-8 は、各層境界r = 15cm 位置における、例題A と例 題Bの時系列鉛直変位をプロットしたグラフである. t = 5s における両例題の変位量を比較する.1層表面にお いて例題A は $u_z = 0.0009$ cm,例題B は $u_z = 0.0038$ cm と 約4倍で、第2・3層目の力学特性(Maxwell Model と弾性 体)の違いにより生じた差である.

(3)制動荷重による影響

次に、図-9に記す三角形分布荷重を車両の制動荷重と 仮定し、舗装に発生する内部ひずみを解析する. なお解 析断面は図-4, 層特性は表-2に記した例題 B を使用し、 全層粘弾性モデルとした. 荷重は、図-5のパルス荷重と し、水平方向の荷重は鉛直荷重の半分とした.







1層下面の水平ひずみ ε_x を図-10に記す.図-10(a)は 鉛直方向の等分布荷重 p_0 ,図-10(b)は鉛直方向の逆対称 荷重 p_1 ,図-10(c)は水平方向の等分布荷重 q_0 ,図-10(d) は水平方向の逆対称荷重 q_1 による1層下面の水平ひずみ である.それらのひずみを足し合わせると、三角形分 図-10(e)となる.

t = 0.5s における荷重除荷前の水平ひずみに着目する. 各荷重 $p_0 \cdot p_1 \cdot q_0 \cdot q_1$ により生じる水平ひずみ量を比 較すれば、鉛直等分布荷重である p_0 により生じる水平ひ ずみ ε_x が最も大きく 732µ 生じる.水平荷重でもっとも 大きな水平ひずみ ε_x を生じる荷重は、水平等分布荷重 q_0 で 154µ, p_0 で生じるひずみの 21%である.

3層上面の鉛直ひずみ ε₂ を図-11に記す. 図-10 同様に. 図-11 (a) は鉛直方向の等分布荷重 p₀,図-11 (b) は鉛直方 向の逆対称荷重 p₁,図-11 (c) は水平方向の等分布荷重 q₀, 図-11 (d) は水平方向の逆対称荷重 q₁による 3 層上面の鉛 直ひずみである. それらのひずみを足し合わせると,三 角形分図-11 (e) となる.

図-11 に記した 3 層上面に生じる最大鉛直ひずみに及 ぼす水平荷重の影響は少ない.鉛直等分布荷重により生 じるひずみ量は図-11(a)より 929µ,水平等分布荷重は 図-11(c)より 81µ である.鉛直等分布荷重で生じたひず み量の9%しかなく,水平荷重の影響は限定的である.

5. まとめ

本研究では、対応原理を適用した舗装構造の粘弾性解 析を行ってきた.アスコン層はBurger's Model,路盤・路 床については、Spring Model もしくは残留変位を考慮でき る Maxwell Model を使用し解析を行い、粘弾性解析を行 った.本研究で得られた主な知見をまとめると次のとお りである.

- (a) 他ソフトウエアとの比較により、本理論解の妥当性 を確認した.
- (b) 載荷開始時間における応答は、粘弾性モデルの直列 バネ値にて多層弾性解析した値と一致する.
- (c) 水平荷重は比較的, 浅い層までしか影響を及ぼさない.
- (d) 残留変位量は,表層に近い位置の方が大きい.これ は,各粘弾性層で生じた残留変位を足し合わせて求 まる残留変位量である.

適切な粘弾性パラメータと解析モデルを設定できれば, 粘弾性解析による残留変位解析を行えることが明らかに なった.アスファルトコンクリートの材料研究は古くか ら行われている.これら研究の貴重な試験結果と,本理 論により求まる解析値との整合性を図り,実現象を精度 良くシュミュレーションできる力学モデルの作成を,今 後の研究課題としたい.

謝辞:本研究は科研費(基盤研究(C), 20560431)(研究代表者:長岡技術科学大学准教授 高橋 修)の助成を受けて行ったものである.

参考文献

- 1) 木村孟: 土の応力伝播, 鹿島出版, 1978.
- Poulos, H.G. and Davis, E.H.: Elastic Solutions for Soil and Rock Mechanics, John Wiley & Son's, 1974.
- 姫野賢治,丸山暉彦,菅原照雄:パソコン用多層弾性構造 解析システム(ELSA)の開発,第18回日本道路会議一般論文 集,pp.338-339,1989.
- 舗装工学委員会:多層弾性理論による舗装構造解析入門, -GAMES (General Analysis of Multi-layered Elastic Systems)を 利用してー,舗装工学ライブラリー3,土木学会,2005.
- Park, S.W. and Kim, Y.R.: Analysis of Layered Viscoelastic System with Transient Temperature, ASCE, *Journal of Engineering Mechanics*, pp. 223-231, February 1998.
- Hopman, P.C.: VEROAD: A viscoelastic multilayer computer program. *Transportation Research Record*, 1539, Transportation Research Board, National Research Council, Washongton, D.C., pp.72-80.
- Chen, E.Y.G., Pa, E., Green, R.: Surface loading of a multilayered Viscoelastic Pavement: Semianalytical solution., ASCE, Journal of Engineering Mechanics, Vol. 135, No. 6, June 2009.
- Wang, J., and Birgisson, B.: A time domain boundary element method for modeling the quasi-static viscoelastic behavior of asphalt pavements, *Engineering Analysis with Boundary Elements* 31, ELSEVIER, pp.226-240, 2007.
- 9) 董勤喜,姫野賢治,八谷好高,坪川将丈,松井邦人:動的 荷重を受ける粘弾性多層構造の有限要素解析,土木学会舗 装工学論文集,第8巻,土木学会,pp.207-213,2003.
- Elseifi, M.A., Al-Qadi, I.L., Yoo, P.J.: Viscoelastic modeling and field validation of flexible pavements, ASCE, *Journal of Engineering Mechanics*, Vol. 132, No.2, pp.172-178, February 2006.
- 11) 国尾武: 個体力学の基礎, 培風館, 1977.
- 12) Flugge, W.: Viscoelasticity, Blaisdell Publishing Company, 1967.
- 13) 井上裕嗣, 上林 稔, 岸本喜久雄, 渋谷寿一, 小泉 堯:高速 フーリエ変換を利用した数値ラプラス変換・逆変換, 日本 機械学会論文集, 57 巻 542, 2523-2528, 1991.
- 14) 藤波 潔, James MAINA, 井上 武美, 松井 邦人:表面に作用 するモーメント荷重を考慮した多層弾性構造解析, 土木学 会論文集, No.795/V-68, pp.56-65, 2005.
- 15) 松井邦人,マイナジェイムス,董勤喜,小澤良明:鉛直および水平方向に円形等分布の荷重作用を受ける舗装構造の弾 性解析,土木学会舗装工学論文集,第6巻,pp.100-109,2001.
- 16) 小澤良明, 松井邦人, 井上 武美: 粘弾性解析のためのハイ

VISCOELASTIC ANALYSIS OF PAVEMENT STRUCTURES BY APPLYING THE CORRESPONDENCE PRINCIPLE TO THE 'GAMES' SOFTWARE

Yoshiaki OZAWA, Osamu TAKAHASHI and Kunihito MATSUI

The purpose of this paper is to confirm that the GAMES software can be used for the viscoelastic analysis of pavement structures by introducing the correspondence principle. By representing mechanical characteristics of pavement layers by the generalized Maxwell model, the solution of multilayered viscoelastic system is derived. Not only uniform vertical and horizontal load but moment load can be applied at pavement surface. Fast Fourier Transform (FFT) is used for computing responses. As an example problem, mechanical characteristics of pavement layers are modeled by viscoelastic models such